小杉さんがいらした時の小杉さんの様子は本部長からはどんな風に映りましたか。

本部長：もうそれこそ、スタッフが近くのバス停まで迎えにいって、あっ来たなと思ったら、凄く痩せていて、支えられて…車からどうにも降りてこないんです。それで立ち上がれない。なんとか立ち上がらせて、でも歩けないのでずっと支えられてという状態でしたね。

本部長としては、そんな状況をみて、どうしようと思ってどんなことをなさったんですか。

本部長：入院を長くされていたこと、そして身体の前を全部開けるというのは小杉さんに限らず、体力が落ちるのを危惧していたんですが、手術のタイミング等でご連絡をいただいて…

小杉：言い忘れましたが、手術の直前にも、これから手術しますと言って本部に電話してます。それで奥さんから遠隔で気を送ってもらってます。

本部長：いらした時はそんな状態でしたので、実際お仕事をされてもご自身が起きるのも大変な状態で、でもなんとかお客様の役に立ちたいという一念で座りながらやっていたということを伺っていました。多分それをはたから見ればどちらが患者さんか分からないくらいの状況だったと思います。そういうこともあって、静岡でなんとか治してくださいということで着いた日の午後に一回治療をして、次の日の朝一番でもう一度治療してから新潟に戻るということを計画しました。

着いた日は、起き上がれない、自力で移動できない、寝たら自分で起きれない、という状態。実際、手を握ってみてとか力を入れてみて、とやっても全然力を入れる感覚が…かなり弱ってるなあという感じでした。

でも、まず何はともあれ言ったのが「次の日に元気になって帰すからね」とお伝えてして「大丈夫だから。ここまで来たんなら治って帰りましょう」というお話をさせていただいて、当日は痛いところ含めてまず気導力をたっぷり流しながら、それこそ基本的なアプローチと言ってもいいんですが、今の衰弱した身体が喜ぶようなことをやって…まず気分が変わりましたよね。

小杉：顔色が変わったと言われ、気分が楽になりました。

本部長：で、初日に気分が良くなりました。実際痛みなどかなり減って、身体の力感も出て抵抗もだいぶできるようになって「これで一晩休んでもらえれば次の日はもっと」ということをお伝えしました。

ご自身の中でずっと病人みたいな感じで捉えていたのと、自身の気合いとしては「早く良くなるぞ！」というのが強いところでジレンマになっていたものが、身体として手応えを感じてくれて気分良くなっている部分とか、あとストレスとか当然あったものを抜いて「病人」という段階から「治る人」にステージが上がったような感覚が感じられたと思うんです。という初日があって、まだヨロヨロはしてましたよ。

初日は私が車でホテルまで送っていったんですが、まだその時は一人で車を降りるのは大変だったですね。

そして二日目の朝、私が迎えに行って『あ、随分元気になってるなあ』という印象でした。その日朝からまた続きの施術を行いました。

今度は身体の中で治りたがっている所に目覚めてもらうような…眠っている所に気導力を入れて、さあここ力を入れてみてと言って気導力を入れて再度力を入れてもらうと入るんですよ。それがある程度全身張ったところで「傅さん、起きてみようか！」と起きてもらったら、傅さんちゃんと起き上がって「うわ！凄い！…立てる！」と。え？スクワットできるの！？

小杉：会長の前で、スクワットやって見せたんですよ！

二日目の治療後の
スクワットには
本人も周りもビックリ！